

マタタビ，サルシナ，ミヤママタタビ

山口陽子*・菊沢喜八郎**

マタタビはマタタビ科マタタビ属の植物で，北海道では山林にごく普通にみられるつる性の木である。道内に自生するマタタビ属には，マタタビの他に，サルシナとミヤママタタビがある。このうちミヤママタタビは比較的高いところまたは北の地域に産する。3種とも，茎自体で他の樹木などからみつく。マタタビとミヤママタタビはあまり高くよじ登らないが，サルシナはしばしば樹冠部に達する。これらの種は林業関係者にとっては害木で，造林地では見つけ次第駆除される運命にあった。しかし，サルシナとミヤママタタビは生で食べてもジャムにしてもおいしいし，マタタビは塩漬けや果実酒の原料になるため，最近は一村一品に取り上げられるなど，人気が高まっている。

3種の見分け方

3種のうち，サルシナは葉に光沢があるので見分けやすいが，マタタビとミヤママタタビの葉はよく似ている。よくみると，マタタビは葉の基部が円形ないし浅心形なのに対して，ミヤ

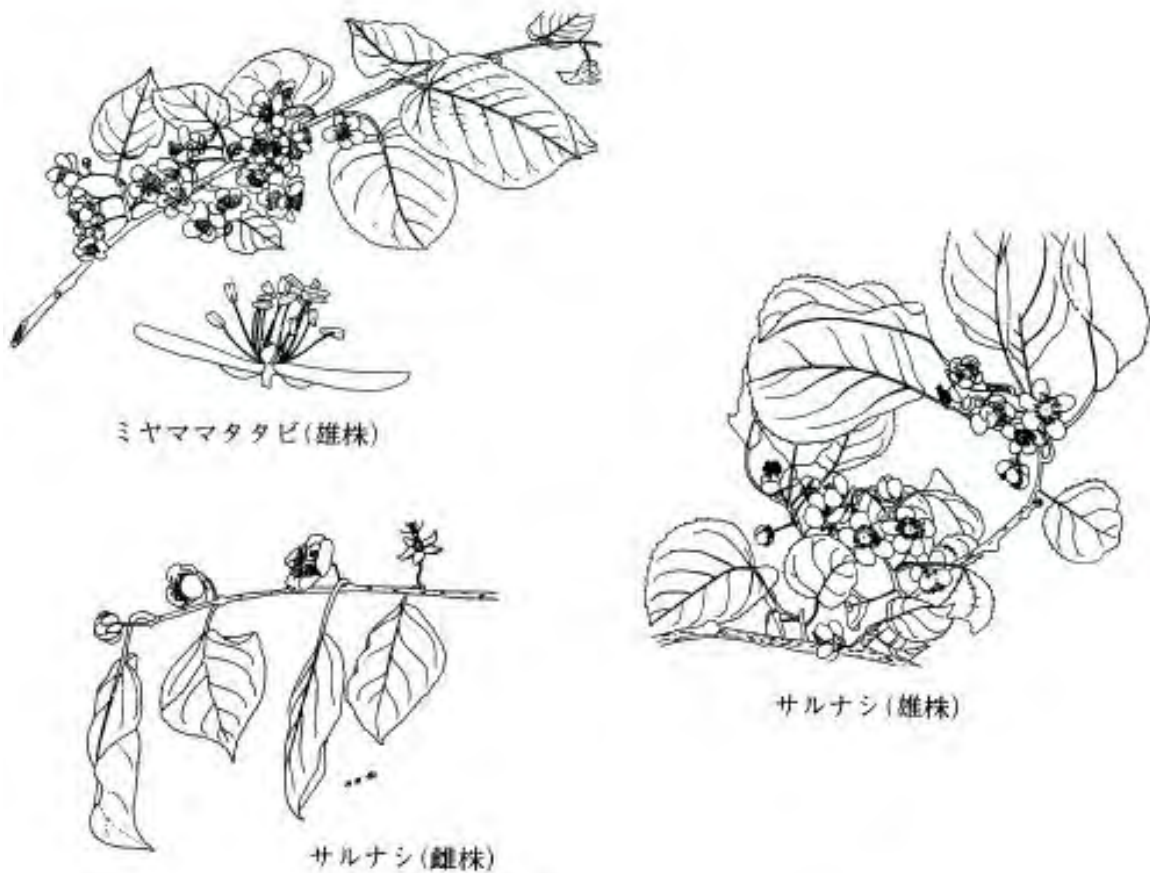


図 - 1 サルシナとミヤママタタビの葉と花

マタタビでは心形である(図 - 1 参照)。また、マタタビは葉の先端から中央部にかけて白くなることが多いが、ミヤママタタビでは同じ部分がピンクになる。もっとも、ミヤママタタビも色がつきはじめた頃(6月上旬)は白で、やがてピンクに変わるため、これもあまり確かな目安とはならない。この2種を簡単に見分けるには、枝を折ってみるとよい。マタタビの髓は白っぽく充実しているのに対して、ミヤママタタビの髓は空室で、薄い皿のような壁で細かく仕切られている。サルナシの髓はミヤママタタビに似ているので葉のないときは迷うかもしれないが、ミヤママタタビの枝の色は赤みが強いのにに対して、サルナシは灰色がかった褐色である。

開 花 時 期

花は、同じ地域ではミヤママタタビ、サルナシ、マタタビの順に咲く。美唄では、ミヤママタタビが6月中～下旬に、サルナシが7月上～中旬に、そしてマタタビが7月中～下旬に開花する。開花時期は年によって7～10日程度ずれる。サルナシとマタタビは時期を接して開花するが、同じ地域で2種の開花が重なることはないようである。

開花時期は同一地域では個体間でかなり同調しているようである。1989年に試験場の実験林でマタタビの開花を個体ごとに調べたところ、図 - 2 のようにほぼ同調して開花することがわかった。これは、虫による受粉を確実にする上で都合がよいと考えられる。なお、ひとつの花の寿命は、マタタビでは約2日、サルナシでは約3日であった。

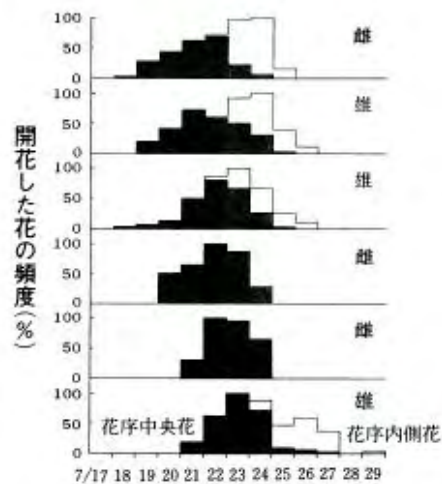


図 - 2 マタタビの開花期間(1989年 美唄市)

マタタビは1花序に1～3個の花をつける。雌株は多くの場合1花序1花である。複数の花がつく場合には、花序の中央の花(図中の黒い部分)から咲き始め、それが咲き終わる頃に残りの花(花序内側花、図中の白抜き部分)が咲き始める。この図は、雄雌それぞれ3株で、開花状態にある花の数を毎日調べ、その数が最も多かった日を100として毎日の開花量を相対的に表している。

花 の 特 徴

3種とも、花は白色で花弁の数は基本的に5弁である。花の大きさ(径)は、ミヤママタタビが1.5～2cm、サルナシが2～2.5cm、マタタビが約3cmである。マタタビとミヤママタタビの雄しべは黄色なのに対してサルナシの雄しべは暗青色である。マタタビ属はどの種も、個体によって雄花だけをつけるものと両性花だけをつけるものに分かれている(図 - 1 参照)。雄花には退化した雌しべがあるが結実はしない。一方、両性花には雄しべと雌しべがあるが、花粉は不稔である。つまり、両性花は機能的には雌花と同じで、雄株の花粉で受精しないと結

実できない。両性花の不稔花粉は一見まったく無駄のように思われる。しかし、両性花から雄しべを取り除くと、雄しべをつけた花に比べて種子の数が大きく減ってしまうことがわかった。これは、雄しべを除いた花では送粉昆虫（マルハナバチ）の訪花頻度や滞在時間が少なくなったためである。マタタビ属の花には蜜線がないので、両性花の不稔花粉は、昆虫に雄花の花粉を運んできてもらうための報酬になっているのだ。

枝の伸び方と花のつきかた

マタタビ属は落葉したあと（葉枕）から翌年の芽が伸びる。1本のシュートから翌年河本のシュートが伸びるかをサルナシで調べてみた。つるになった枝（葉数 35～47 枚）からは翌年に 15～21 本のシュートが伸びる。一方、つるにならなかった枝（葉数 1～14 枚）からは、翌年は多くの場合 1～2 本しかシュートが出ない。短い枝では、シュートを全く出さずに枯れてしまうものもかなりある。また、花は葉の付け根のすぐ上につくのであるが、花が結実するとその葉のあとからはシュートが伸びることはないようである。

表 - 1 に、マタタビ属 3 種について、当年枝のうち何割が花をつけたか、1本の当年枝に何個の花序がついたか、そして花序当たりの花の数はいくつであったかを示した。雄株と雌株（両性花をつける個体）を比べると、どの種でも、雄株の方が着花した当年枝の割合も当年枝当たりの花数（当年当たりの花序数×花序当たりの花数）も多いことがわかる。つまり、雄株の方が個体全体でつける花の量が多いということになる。これは、雌株は果実を作るのにエネルギーが必要なのに対して、雄株はそのエネルギーを花に振り向けられるためと考えられる。

表 - 1 マタタビ属 3 種の花のつきかたの比較

種		着花した当年枝の割合(%)	当年枝当たりの花序数 a	花序当たりの花数
ミヤマ	雌株	68	2.6	1.0
マタタビ	雌株	89	4.8	1.8
サルナシ	雌株	60	3.0*	1.3*
	雄株	81	3.0	4.0
マタタビ	雌株	51	2.5*	1.1*
	雄株	88	3.2	1.7

a：着花した当年枝当たりの花序の数

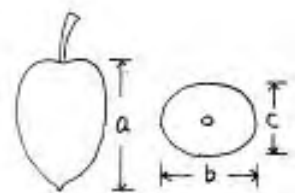
*：個体間で有意な差があったもの

果実の形

表 - 2 に 3 種の果実の重さと形に関するデータを示した。果実の形を表す項目は、3 種とも、それぞれ個体によって差がみられた。つまり、細長い実になるか丸っこい実をつけるかといったことは遺伝的に決まっているのである。したがって、これらの野生の果樹から擾れた形質をもつ個体を選抜して増やそうというときに、果実の形を選抜の対象にすることは有効である。

表 - 2 マタタビ属 3 種の果実の重さおよび形状

種名	個体数	測定果実数	果実生重 (g)	果実の長さ a (mm)	果実の幅 b (mm)	細長度 a/b	偏平度 b/c
ミヤママタタビ	3	25-31	1.3	17.0	10.7	1.59	1.06
			0.84-1.62	12.8-20.9	9.9-11.6	1.28-2.00	1.03-1.10
サルナシ	6	16-27	4.5*	18.9	19.1	1.00	1.16
			4.03-5.25	15.6-24.4	17.1-20.5	0.77-1.26	1.07-1.27
マタタビ	5	20-40	3.7*	29.1	15.4	1.92	1.07
			3.18-4.22	25.3-34.8	14.0-17.1	1.49-2.48	1.05-1.10



上段の数値は調査個体全体の平均値を、下段の数値は個体の平均値の幅を示す。*：個体間で差がなかったもの。

最後に、果実酒の作り方を紹介しよう。重さの割合で、果実：ホワイトリカー：氷砂糖 = 1 : 2 : 0.2 ~ 0.3。マタタビは果実が青いうちに漬ける。サルナシとミヤママタタビは果実が成熟して少しやわらかくなった頃を使う方が香りがよいようである。漬けたら冷暗所に保存し、半年から1年で果実を引き上げる。

(*樹木科 . **森林資源部主任研究員)